

# 宮城県図書館のルーツを訪ねて その4

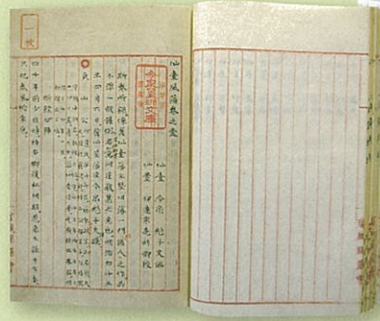
## ～今泉・小西・大槻文庫～

本誌第23・24・26号において「宮城県図書館のルーツを訪ねて」と題し、本館の歴史を語る上で欠かせない特別コレクションとして、「養賢堂文庫」「青柳文庫」「伊達文庫」を特集しました。これらの文庫のほかにも本館が受け継いだ貴重なコレクションが宮城県図書館には多数所蔵されています。今回の特集では、いずれも貴重な資料を含む3つの文庫をご紹介します。

### ◆今泉文庫

今泉篁洲(1866-1939)は、砲術家・若林新九郎の次男で、祖父は仙台藩の大番頭を務め詩人としても名高かった若林靖亭です。篁洲は明治から昭和にかけて漢詩人として活躍したほか、郷土の先人の伝記を集成した『仙台近古史談』や『仙台人物史』を執筆し、晩年には菊田定郷編『仙台人名大辞書』の監修を務めるなど、郷土人の研究にも大きく貢献した人物です。

篁洲没後の昭和15年(1940)、遺族の厚意によりその蔵書544部1,029冊が本館に寄贈されましたが、戦災により焼失し、現在は78部、188冊が所蔵されています。今泉文庫はそのほとんどが郷土資料と詩文集などの自筆稿本からなっています。篁洲は愛書家であり、蔵書にはカバーを自分で作製し、書名などを書き入れて大切に保存していたといわれています。その中の1冊、『仙台風藻』(自筆稿本)は江戸から明治期までの千名を越える郷土人の漢詩文を集成したものです。手製のカバーには、「コノ仙台風藻ハ余ガ三十余年ノ星霜ヲ経テ編纂シタルモノナリ。余ガ没後ハ紙屑トセス図書館ニ寄付シテ保存セラレタシ。今泉彪識」との書入れがあり、その思いのほどが読み取れます。



今泉篁洲『仙台風藻』(自筆稿本)



篁洲手製の『仙台風藻』カバー

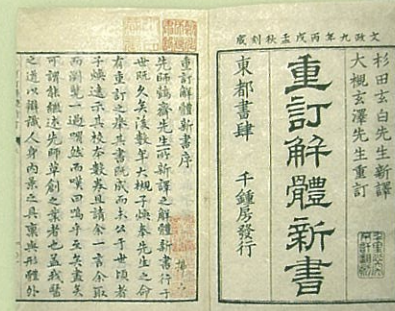
### ◆小西文庫

仙台市河原町の旧家である小西家の小西治兵衛氏から寄贈された1,574点からなっています。この文庫は、もと小西家から出て本家伊藤家を継いだ伊藤清次郎\*の80歳を祝って、11代小西利兵衛が昭和10年(1935)に邸内に設けた私設・非公開の文庫でした。同家在来の蔵書に加え、飯川寥廓(?-1902)の旧蔵書が中心となっています。

飯川寥廓は伊達慶邦夫人の侍医で、維新後は海軍省勤務を経て医院を開業し、古文書・書画の所蔵については仙台随一といわれた蔵書家でした。寥廓はまた、明治中期の仙台文学が盛んであったころに文人として活躍し、『奥羽史料』の編纂にあたるなど多くの著作を残しました。

小西文庫の蔵書はこれらの事情を反映して、医書を中心とした科学書が多いこと、また史書・詩文集が多いことが特徴となっています。また、鹽竈神社の神官であり、国学者でもあった藤塚知明の旧蔵書で、仙台の五大文庫の一つとして知られる「名山蔵書」が含まれていることも注目されます。

\*伊藤清次郎(1856-1938) 仙台市最初の市議会議員、宮城県議会議員として活動する一方、電気事業の開拓者として大きな役割を果たす。また、電狸(でんたぬ)と号し口述した『仙台昔語 電狸翁夜話』は幕末から明治初期における仙台の姿を知る上での好資料。



杉田玄白翻訳・大槻玄沢重訂『重訂解體新書』



小西家の文庫に揚げられていた看板

### ◆大槻文庫

本館の第8代館長も務めた国語学者・大槻文彦(1847-1928)の旧蔵書で、1950年に遺族から寄贈された71種215点からなる文庫です。わが国初の近代的国語辞書『言海』の自筆稿本(県指定文化財)が収められていることによっても知られています。

明治から昭和戦前期にかけて日本語文法書として代表的な存在であった『広日本文典・別記』(自筆稿本)や北海道と北方領土に関する地誌『北海道風土記』(自筆稿本、県指定有形文化財)など文彦の自身の著作のほか、江戸期の儒者で父にあたる大槻磐溪の著作が大部分を占めています。また、文彦の兄如電や、仙台藩校・養賢堂の学頭を務めた一族の平泉・習斎親子などの大槻家の系譜や学問を知る上で貴重な資料が多く含まれています。

また、漢詩文の軸物や大槻文彦の肖像画など、図書以外の形態の資料が含まれていることもこの文庫の特色です。



『広日本文典』

※いずれも大槻文彦自筆稿本

●これらの貴重資料に関するお問い合わせは…

宮城県図書館3階 みやぎ資料室

電話 022-377-8483 FAX 022-377-8494

\*ご紹介した貴重資料のご利用は、原則としてマイクロフィルム、複製本など代替資料となっています。すべてに代替資料があるわけではありませんので、事前にお問い合わせください。